1992年4月17日第三種郵便認可(毎月3回7の日発行) 2013年3月20日発行 SSKR 増刊通巻6840号

SSKR I.L.EXPRESS

全国自立生活センター協議会（JIL）
Japan Council on independent Living Centers
〒192-0046 東京都八王子市明神町 4-11-11-1F
TEL 042-660-7747 FAX 042-660-7746
E-mail:office@j-il.jp URL http://www.j-il.jp/

東北関東大震災 障害者救援本部特集号

自立情報発信基地 No.7

― 被災地で移送サービスをしています ―

被災地では公共の交通機関が寸断されたり高台の仮設住宅へ転居したりで、日常生活の移動は困難を極めています。そこで救援本部では移送サービスを地元の事業所へ委託しています。

今回はささえ愛山元（宮城県）ケアホームめぐみ（宮城県）ハックの家（岩手県）から、移送サービスの様子を報告していただきました。

宮城県　山元町　　ＮＰＯ法人　ささえ愛山元
理事長　　中村　怜子

～ともしび～

あの日から丸２年が経つ。悲哀こもごも書ききれないほどの感情が湧き上がる。
ささえ愛山元が、高齢者に買い物や家事援助を提供するボランティア団体を立ち上げたのは、平成６年のこと、高齢化率が急速に高くなった頃でした。民家を改造し小規模のデイサービスを始めたのは１０年前のことです。会員も２４名に膨らみ、高齢者に寄り添い、支える方も生きている喜びを感じながら３．１１まで楽しく活動をしていた。しかし、東日本大震災は、私たちの日常を根底から変えた。

大津波で二つの施設が破壊され、３名の職員も犠牲になり、再開など考えられなかった。戦争でもこんなに破壊されない。山元町はひどい被害だと支援の手をあちこちから頂いた。戦後の窮乏生活は体験していたが、これまで味わったことのない身体の芯からの震えが止まらない日々だった。

移動サービスネットワークの菅原さんが菊地正明さんと一緒に避難先で憔悴している私達に会いに来てくれた。ビックなプレゼントを持って行くからとの前約束とおり、「隣町の元歯科医院の跡地で活動しませんか」と障害者センターと大文字のステッカーのある軽自動車を「自由に使っていいよ」と置いて行った。

全てを失った中、地獄に仏であった。忘れもしない５月２日のこと。被災した障がい児・障がい者のために設立した「被災地障がい者センターみやぎ」の県南支部の業務を担当することになった。主に高齢者に介護を提供する１８年間であったので、私たちに出来るのであろうか。震災から２ヶ月も経っていて、障がい児や障がい者はどこで暮らしているのか？避難所では会えなかった。続々集まってくる支援物資を亘理や山元の仮設に配りながら探した。

余震がまだ続いていた頃、視覚障害者が余震で転倒して・・・と役場から援助依頼の電話が入った。職員はすぐ飛び出し、額に傷を負って震えていた白杖使用者のWさんを助けた。その後彼女は、サロンのお客様第１号となった。又、みなし仮設に朝７時に迎えに行き、２０キロ先の中学校に息子を降ろし、更に７キロ先にある障害者憩いの場へ母親を乗せた。帰りは母と息子を家に届ける。込み合っている時間帯の送迎も職員の協力で支えることができた。親子の移送サービスを何日かしていた日、息子から被災地障害者センター・・・の看板をはずしてほしいと云われた。恥ずかしくて学校に行けないと。車が１台しかなかったので私たちも、デリカシーが足りなかった。急きょ、職員の買ったばかりのプリウスを走らせた。

ケアホームの交通も寸断され、職員の車を使いながらの受診や買い物などを支援することができた。町の半分以上が被災し、地域を知り尽くしている私たちは仮設を順番に回ってパラソル喫茶を開き、被災者に寄り添った。今度の３月９日は久しぶりのパラソル喫茶を開催します。

この２年間は生きるということはなにか、幾度も自問しました。宮城県の最南端で細々と活動している「ささえ愛山元」が、多くの方々と関わりを持って今日まで生かされてきた。絆というともしびとなって。

岩手県　田野畑村　　ＮＰＯ法人　ハックの家
施設長　　竹下　敦子

移送サービスを通して見えたもの…

平成23年3月11日、私達にとって忘れられない日になりました。この日より2年、長かったのか、短かったのか、無我夢中の時間が過ぎ去っていきました。そんな、2年間のなかで私達にとって大切な支援の一つとなったのが「移送サービス」です。この事業が震災の時、どれほど皆さんの力になったのか、この場を借りて私なりにまとめていければと思います。

移送サービスが始まる前、ハックに多くの人が相談にきました。その相談のなかで一番多かったのが「病院に通院したいが、毎回タクシーだ

と大変。しかも、タクシー自体がつかまらない…。」「買物に行くにも車椅子では行くのが難しい。」「勤務先へ出勤できない。」など移動に対するものでした。涙をながして相談にくる方もいて、その当時「こんなに必要としている人がいるのに、なぜ移動に対する支援が我が村にはないのか…。」と考えさせられる毎日でした。そんな中、「移送サービスをハックの家でやってみないか。」との話がありました。三陸鉄道がまだ復旧の目途が経っていない中の話しで、とても嬉しい申し出でした。

ある自閉症の男性から手紙が私達のもとに届きました。「自分の職場が津波に流されてから、もう仕事はできないと思っていました。でも、何とか仕事を○○さんから（就業・生活支援センターの方）見つけてもらいました。げど、自分には車の免許がなくて、せっかく見つかったのにいけませんでした。ハックで送迎してくれると聞いてすごく嬉しかったです。そして、自分でも通えるように免許をとろうと思って、とれました。冬は助けてもらいたいですが、自分でなんとかいけるようになりました。ありがとうございました。」という内容でした。すごく嬉しい手紙でした。移送サービスを使っていく中で、スタッフと話をしたり、保護者と雑談をしたりしていく中で、免許を自分も取得しようという気持になり、震災前より頼もしくなったように感じました。これが、本当の復興なのかなと思いました。

このように、移送サービスのスタッフの１人ですが、一人一人の気持に寄り添い小さいけれど大きな成果を挙げているのではないかと思っています。少しずつ交通も復旧していることもあり、再度ニーズ調査を私たちなりにしています。当初の予想では、支援ニーズは少なくなっていると考えていましたが、減るどころか増えている現実に驚いてしました。バスは復旧しても、スクールバスと一緒で利用しにくくなったり、長時間待ち時間があり、障害を持った方にとっては利用が難しかったり…。まだまだ課題は山ずみという現実をしっかり受け止め支援していかなければと改めて思いました。

最後に、応援していただきました全国の皆様本当にありがとうございます。復興はまだまだこれから、本当の意味での復興にむけこれからも頑張っていきたいと思いますので、これからも宜しくお願い致します。

宮城県　気仙沼市　　ＮＰＯ法人泉里会

ケアホーム めぐみ　　菅原　満子

～震災で覆った心の傷～

私たちは特定非営利活動法人泉里会「ケアホームめぐみ」は、知的・精神・身体の三障がい対応の共同生活介護事業所です。その他、ショートステイ・日中一時支援と現在は東北関東大震災障害者救援本部よりご支援を受け、南三陸町気仙沼エリアの送迎サービスも行っております。以前、送迎支援サービスはめぐみ入居者のみ行っ

ていましたが、３・１１の東日本大震災が東北を襲い、家・車が流出し地域に住む障がい者の移動の足を失い、いつも通りの生活が全く出来なくなってしまいました。

通所施設に通う障がい者の方が、施設から遠方の仮設住宅に移り困っている現状を皆で話し合い、外部から来られたボランティアスタッフ（JDF・CIL たすけっと）の方々と交代で送迎を行いました。平成２４年の春にボランティアスタッフの撤退を期に、送迎に掛かる費用を助成頂きながら地元の事業所である私たちが引き継ぐことになり現在に至っています。

主に送迎に行っている場所は、支援学校や通所施設・ケアホームめぐみ入居者数名が通うデイケアです。土日以外は毎日送迎支援を行っております。また支援学校に通っている障害児２～４名、日によって利用する人数が違いますが、送迎後そのままケアホームめぐみにて日中一時支援を利用しご家族さんが仕事終わりに迎えに来るまでお預かりしております。

また送迎業務に携わり一番気を付けていることは、当たり前な事ですが安全運転です。大変な所は大人と子どもでは違いますが中にはわんぱくな子も居て、運転中でもシートベルトを自分で外し立ち上がったり、ドアを開けようとしたりヒヤッとすることも屡々あります。

成人の方は比較的静かに座っており、通所施設で今日作業した内容や身近に起こった事を話してくれて会話を楽しみながら送迎を行っております。でも、明るく振舞っていてもまだ震災の記憶が新しいのでしょう。家を流されて仮設住宅での生活を余儀なくされた方の口から「いーな。家がある人は…。また、いつになったら普通の家に住めるのかなー」と流された家の跡地を遠い目をしながら話されます。家を流されてない私としては流失した方々の気持ちはすべてくみ取ることが出来ません。そう話された時、なんと声を掛けていいものか未だに分からない所があります。やはり傷を受けた方とのコミュニケーションは難しいと痛感しております。

でも送迎をしていて大変な事ばかりではありません。楽しい事もあります。それは利用者さんや家族さんとの会話も楽しみの一つにしています。本当に他愛もない、ほんの数分間の会話でしかありませんが、いつも帰り際「ありがとう。毎日ご苦労様」と一礼されます。時折、自家栽培している野菜など手に持って待っており「これホームで食べらいん」と渡されます。こちらとしてはただ安全に楽しく送り迎えをしているだけなのにと最初は思いました。今思えばそれほど障がい者またはその家族さんから見たら、支援学校や通所施設に普通に通える足が出来た事によって生活が少しずつ戻ってくるのかなと、自己満足の思いでありますがとても嬉しくなる瞬間です。

最後に、まだまだ震災で覆った心の傷は癒えてはおらず、選択肢ばかりが多用にあり、何が正しいのかも分からない渦中に置かれています。それは私たちも同じです。それでも支援を頂いている皆さんのお顔を思い出される時に、やはり諦めてはいけないという力が何処からか湧き出て来ます。それは本当に不思議な、そして貴重な体験をさせて頂いているのだと改めて感じます。

何かを得るためには、何かを失わなければいけない、最近そんな言葉を耳にしましたが、得たものを育てて行くのはやはり自分自身であると強く心に結び、これからも頑張ろうと思います。

2/3 逃げ遅れる人々

完成記念上映会を終わって

２月３日に完成記念上映会を東京ウイメンズプラザで行ないました。午前と午後の部合わせて２４４名の方がご来場くださいました。寄せていただいたアンケートに、「外国にも広めたい」「地域の方とのつながりが大事だと思った」「障害の有無に関わらずより多くの方に見ていただきたい」などのお声をいただきました。

１回目 上映時挨拶　三澤 了　(DPI 議長)

70分にわたる映画を見せていただいて、本当に当時のことがまざまざとよみがえってきました。私自身３月１１日は、それまでずっと大病をしていて、ベッド上の生活をしておりました。それでその日は初めて大きな団体の集会があるのでなんとしても出てこなければだめだと言うことで、意を決して車に乗せてもらって出かけていきました。その途中で大地震を東京で実感しました。小さな携帯で地震の映像を見せてもらったのですが、なんだか本当のことだと思えないような、なにがなんだかさっぱり分からない状態でした。それで家に戻ろうとしても、車がストップしてしまい、9時間も車のなかに閉じ込められました。その間も次から次へと大変な状況が知らされてきて、これはとんでもないことになっているんだということを実感しました。今ごらん頂いたように当時からの困難な状況が解決しているわけでもなく、まだまだ多くの問題が残されています。ただなんとなく忘れてしまいがちになるそういうことはあってはならないと思います。多くの困難を抱えて復興に立ち上がっている皆さんを、私たちは支援しなくてはならないし、今後今回のことを教訓にしてどうして行くべきかを、今から準備をしていかなければならないと思います。

一つ感じるのは、緊急時に何かの対策をたてることも大事なんですけれども、何にもない時に障害者が普通の地域でより多くの市民と交わって生きていける、そういう状態が作られていれば、今回のように一般市民の倍以上の方が亡くなったり、逃げ遅れてしまうということがなくてすむんだと考えます。私たち今回のこれを忘れないためにも、それを強調していくためにも、こういう作品を作って全国各地の多くの方に見てもらって、この思いを一緒にさせていけたらと思います。(概略)

２回目 上映時挨拶　中西 正司(救援本部代表)

皆さん、今日は遠いところ上映会にお越しいただきありがとうございます。震災の第一報を受け取ったのはテレビ放送からで、これは大変な事態が起こっていると思いました。早速、DPI日本会議、全国自立生活センター協議会（JIL)、それから関西のゆめ風基金と連絡を取り合って、２日後に東北関東大震災障害者救援本部を立ち上げました。ゆめ風基金の方からは、「基金から１億円を使って欲しい。前線基地は東京になるから」ということで、東京事務局を八王子に開設して JIL 事務局は全面的に応援体制をとることにしました。

この映画の中でも言われているように、今回の震災の学びから、今後の震災に備えて「緊急時の個人情報保護の取り扱いはどうあるべきか」「障害特性に配慮した避難所・仮設住宅の設置」、「災害救助に係る費用の方法」など考えていかなければならない大きく４つぐらいの事項があると思います。今後、このドキュメンタリー映画をできるだけ多くの皆さんに見ていただいて、同じことが起こったときに同じ事を繰り返さないように、うまく連携が取れていけば良いなと思っています。これから市民の輪が広がっていくことに期待しています。(概略)

「逃げ遅れる人々 東日本大震災と障害者」を制作して

監督 飯田 基晴（映像グループ ローポジション）

この作品は、東北関東大震災障害者救援本部の活動の一環として、被災地の障害者の置かれた状況を記録し伝えることを目的に製作が決まった。救援本部から話をもらったのは2011年6月で、撮影は翌月から開始した。この時期は震災直後の緊急支援が一応は落ち着き、新たな課題や継続的な支援の必要性が見えてきた時期だと思う。

僕は学生時代から10年ほど、有償ボランティアとして自立生活を送る方の介助をしてきたので、一般の人よりは障害者を取り巻く状況について理解しているつもりだった。しかし最初の打ち合わせで、被災地の障害者の状況について説明を受けたが、なかなか想像ができない。地域ごとに状況も異なり、障害が家庭環境が違えば、また抱える困難や課題も違うのだ。それをどういったかたちで映像にまとめていくか、簡単に判断していけることではなかった。

とにかく現地を訪れ、撮影を進めながら方向を決めていくことにした。

実際に現地で直接話を聞けば、確かに具体的な状況が見えてくる。しかし、それぞれの現場で様々な悩み・苦しみがあり、話を聞くうちに僕自身の受け止める容量を超えてしまう。取材を重ねる中で、何度もそういう状態に陥った。

取材から戻り、インタビュー素材を見直す過程で、語られた内容をようやく見渡せるようになり、そこから次の取材を決めていく、そんな繰り返しだった。

被災地取材の中心は福島県で、そこに岩手県の沿岸部、宮古市での支援活動を加えるに限られた。地域が変われば、取り組みも課題も異なるので、知れば知るほど取材したいところが膨れ上がってくる。だが、1本の作品に盛り込める内容には限りがある。諦めざるを得ないことも少なくなかった。

取材で感じた障害者の課題としては、まず第一に避難の難しさがあげられる。多くの障害者は、健常者と同じペースで避難することはできず、どうしても逃げ遅れる。津波による被害の大きかった東北沿岸部では、犠牲となった障害者の割合は、健常者と比べ2倍から2.5倍にも達した。

また避難所で困難に直面した障害者もいれば、周囲に迷惑をかけるからと避難所に行くことをあきらめた障害者も少なくない。発達障害や自閉症などの障害は環境の変化に弱く、避難所にいることが本人の大きなストレスになりかねない。視覚障害や聴覚障害ゆえに、必要な情報が得られず、不安や苦労を強いられる人も多かった。

災害時には、それぞれの障害が、普段以上のハンディキャップとなるのだ。

今回の震災では、震災前からの、地域の課題も浮かび上がってきた。

東北の沿岸部では、福祉サービスの質・量ともに、都市部とは格段の開きがある。選択の余地もなく、必要なサービスの半分の半分

の半分も受けられないような地域もある。家族介護・介助が基本とされており、家族がいるためヘルパーも派遣してもらえない女性がいた。サービスを受けられても、高齢者向けのデイサービスしかない、来てくれるのは高齢者にしか接したことがないヘルパーだ、そんな話も聞いた。家族で面倒が見られなくなれば、選択肢は施設入所しかない。こうした状況が今現在も続いている。

取材で印象的だったことを、いくつか紹介したい。

田村市船引で地域の障害者運動を引っ張ってきた被災当事者の女性が、「今回の取材を受けることは気乗りしなかった」と打ち明けてくれた。正直に語ろうとすれば、震災・原発事故というあまりに大きな出来事を前に自分が感じている無力感を伝えることになる、それが嫌だったという。

だが僕は彼女の、自分の気持ちを見つめ言葉にする力と、それを表明する勇気に心動かされた。そして、その無力感は彼女ひとりのものではなく、多くの人々の心情を代弁しているように感じた。

ならばその無力感を共有することから、つながり直すべきではないか。もらい泣きをしつつ、この言葉を伝えたいと強く思った。

原発事故のため、自宅から緊急避難を迫られた南相馬市の女性は、避難所にベッドがないため車椅子から１６日間降りられなかったという。彼女が使っていたのは、リクライニング機能もないシンプルな車椅子だ。どんな思いで座り続けていたのか。深く聞きたくとも、当時の経験を語りながら涙を流すのを前に、しつこく尋ねることなどできなかった。そこにある苦しみや哀しみに、自分の想像力が及ばない。そのことを痛切に感じる体験だった。

また南相馬から新潟に避難した女性は、原発事故のため心の準備もできぬまま、見知らぬ土地で自立生活へ向かうこととなった。

自立生活には、自己決定や責任が伴う。施設での長い入所生活、自宅に帰ってからも家族の中で自分を抑えていた彼女にとって、支援があっても一歩を踏み出すことは、どんなに心細いことだろう。人に語らぬ多くの思いがあるように見えた。だが、もしも語ってくれたとして、僕はその気持ちを理解できるのか。

ドキュメンタリー映画の役割のひとつは、画面に登場する人と観る人を結ぶ、その架け橋になることだと思う。超えられぬほどの壁があると簡単に認めたくない。しかし、話してくれればわかるはず、などと片付けることもできない。

映像は、言葉だけでなく、その人の表情やたたずまいから伝えられることもある。「わかる」「わからない」の間に、「なんとなくわかる」「身近に感じる」、そうした感覚もある。取材で迫りきれなかった部分は、観る側の想像力によって橋をかけてもらえたらと願うほかない。

作品には他にもたくさんの内容を盛り込んだ。作り手として分かりやすく伝えようとしてきたが、いまにして思うのは、分からなさや戸惑いを共有することも大事ではないか、ということだ。

完成させてからも、僕の中にはいろんなものがひっかかっている。

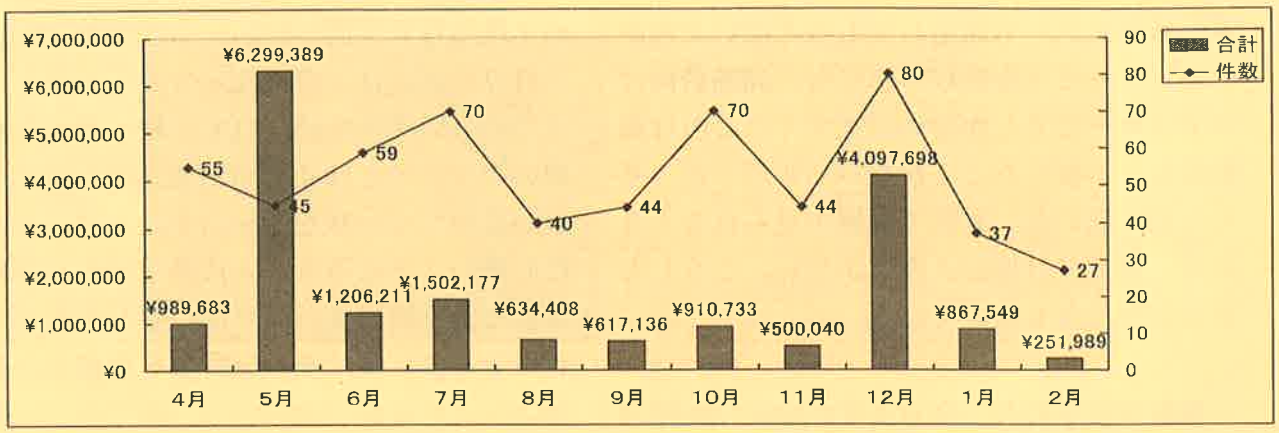
まだ知らないことがあり、分からないことがある。もっと想像しなければならないことがある。そうしたひっかかりを、観る人にも共有してもらえたらと願う。

この作品を通じ、被災地の障害者の状況を知るとともに、それぞれの地域で災害への備えを進めてもらうことを心から願う。

○●○皆様からいただいた支援金○●○

― 2012年4月から2月まで ―

支援金と一緒にコメントが添えられており、支援金を寄せてくださる皆様の想いに触れることができます。



各地で自主上映会

「逃げ送れる人々」が、行なわれております。

自主上映会のご案内は救援本部のホームページをご覧下さい。お近くの会場にお出かけください。
http://shinsai-syougaisya.blogspot.com/

(3/9 東京 立川市)

(3/10 兵庫県 加西市)

DVD販売について

2月5日から「逃げ遅れる人々―東日本大震災と障害者」のDVDの販売を開始しました。ご購入いただいた多くの皆様には大変感謝申し上げます。救援本部事務局にわざわざ足を運んでいただいた方、電話・メールでご注文いただいた方、この場をお借りして感謝とお礼を申し上げます。また、DVD作成にあたり、ご協力いただきました皆様にも重ねてお礼申し上げます。現在、DVDの販売本数は3月で300本を超えました。注文の詳細としましては一般価格が217本、団体・ライブラリー価格が106本です。団体・ライブラリーは社会福祉協議会や相談支援事業者、介助者派遣団体、地域サークル等からご購入いただいております。

震災当初はあまり目を向けられてはおりませんでしたが、完成記念上映会後マスコミ関係の方から多くのお問い合わせをいただいております。震災後2年が経ちましたが、まだまだ被災された障害者の現状や私たちの支援活動は社会的に認知されてないなと改めて実感しております。環境や障害のすべてを伝えきれているわけではありませんが、私たちの町で起こるかもしれない震災にどう対応するか、考えるきっかけになってほしいと思います。

東日本大震災が過去のこととして風化されないように、情報を発信し続けることだと思います。救援本部では皆さまのご厚意に支えられ、被災地の障害者団体と連携しながら、現地での様々な支援に取り組んでいます。救援活動が本来の社会資源に移行できることを目指し、地域の方々とつながれるように、これからもずっと、被災障害者支援を、必要な限り継続していきます。

○●○引き続き 皆様さまのご支援をどうぞよろしくお願い致します○●○

東北関東大震災障害者救援本部

＜東京事務局＞ 全国自立生活センター協議会（JIL）内

〒192-0046 東京都八王子市明神町4-11-11 シルクヒルズ大塚1F

TEL：042-631-6620 FAX：042-660-7746 E-mail：9enhonbu@gmail.com

ホームページ http://shinsai-syougaisya.blogspot.com/

≪救援活動の状況については、上記のウェブサイトにて、随時ご報告させていただいております≫

このお便りはご支援をいただいた皆様に活動報告としてお届けしております。

払い込み用紙は、強制するものではありません。支援金をご協力いただける方はご利用ください。

発行所 東京都世田谷区砧6-26-21 障害者団体尾定期刊行物協会 定価 １００円